

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

性教育は3歳から

博士論文を執筆中の院生が「提出するまで新しいパンツは買いません」と言う。まあ、パンツ云々はものの喩えで、要は、好きなショッピングを封印して論文執筆に専念するという意気込みを表明したのだろう。「しばらくはヨレヨレのパンツで」と笑う院生に、思わず私は叫んでいた——「え!? 事故に遭ったらどうするの!」

その場に居合わせた院生たちは無言。奇妙な沈黙のあと、こう言われた。「えーと・・・先生、どういう意味ですか?」

ええー! だって、ヨレヨレのパンツをはいていたときに限って、万一、交通事故にあったら恥ずかしいじゃない。「いざというときのために」と、しどろもどろで説明する私に、若者たちは冷やかな目を向けた。「『いざというとき』って、そういうときじゃありません」・・・そうか、もっとセクシーな展開のときをいうのね。

この“パンツ事件”によって、私は、自分の中に刻み込まれた家族の性的な価値観に改めて気づかされたのだった。私が育った家庭では、パンツはあくまで「肌着」であり、隠されるべきもの。他人様（医療従事者）の目に触れさせる失礼がある以上、せめて清潔なものを身に着けるべし。これは恥と潔白にまつわる問題である。この教えは娘である私だけでなく、母親は夫の肌着にも尋常ならざる注意を向けていたから、まさに我が家の暗黙の家訓なのだった。

そんなわけで、私にとってパンツは貞操帯にも似た“砦”であり、もちろんパンツのなかの話を両親としたこともない。まあ、その反動で、今こうして性をあけすけに研究する立場になったわけですが。

ずいぶん前置きが長くなってしまったが、本書は、



お母さん! 学校では防犯もSEXも避妊も教えてくれませんか!

のじまなみ著

辰巳出版

定価 1400 円+税

性教育アドバイザーであり「とにかく明るい性教育【パンツの教室】協会代表理事」の著者による家庭での性教育のススメである。泌尿器科の看護師として勤務したのち、自身の子育て経験から「お母さん」たちに家庭でできる楽しい性教育を伝えている。2018年の同会の設立から、母親向けの講演や教材開発に取り組まれ、本の売れ行きも絶好調。本書のキャッチーなタイトルが物語っているように、世の母親の不安や疑問に直球で答える内容である。

家庭での性教育は3歳から。「うんち・ちんちん・おっぱい」が大好きな年齢でこそ、からだについて教えて、妊娠や出産に対する子どもの関心には正面から答えるべき。10歳ともなれば、親の言うことは「キモ、ウザ」と聞き流されるものだが、それにひるまず簡潔に伝え続けること。思春期の「ノーサンキュー期」ではもう遅い! 3歳から10歳が性教育適齢期。まずは、母親自身が「性=恥ずかしいもの」という概念を取っ払い、性器の名前を元気に発する「練習」をすること。子どもの疑問には「いい質問だね!」と返して時間を稼ぎ、それをチャンスに知識を教える。境界線は「水着ゾーン」とわかりやすく説明する・・・など、わかりやすい実践が紹介されている。おぐらなおみさんのイラストも楽しい。

本書のターゲットは「お母さん」。お父さんには期待するのは「まったくもってムダ!」とバツサリ。そのあたりも、母親の不満にリアルに応えるものかもしれない。両親の関係性こそが子どもにとって何よりの性教育になることを考えれば、これからはもっと母親がアテにできる父親が求められるだろう。

それにしても、いつまで母親は家族の「パンツ」の担当でいなければならないのだろう。明るいパンツの話を読んで、再び、パンツにおけるジェンダーの闇を感じずにはいられないのだった。

(大阪大学大学院准教授 野坂祐子)